大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

肉体の喪失(上）：『ブデンブロオク家』の位置

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006557

肉体の喪失（上）

――『ブデンブロオク家』の位置――

伊藤嘉啓

（一）

トォマス・マン（Thomas Mann）に倣つて、數字の暗合から話を始めます。

誰でも知つてゐる通り、『ブデンブロオク家』(Buddenbrooks-Verfall einer Familie) は一九〇一年にフイシア書店より二冊本として出版されました。原稿の完成は前年一九〇〇年の中頃と言はれてゐます。新しい世紀の始つた記念すべき年です。併し、言ふまでもなく、このやうな長篇小説が一氣に出來上る譯がありません。一八九七年にロオマで著手して以來、約三年の歳月をこの小説は必要としました。[1]

要するに三年だけ前世紀の方へ遡るのです。十九世紀も殆ど終りかけた頃に芽え、成長し、さうして一九〇〇年といふ二十世紀の第一年目に完成しました。この數字的偶然は、『ブデンブロオク家』といふ小説の本質と深く結附いてゐるやうに思はれます。

生誕百年とか、創立五十周年記念行事が珍しくないやうに、私たちにはかういふ數字の區切を好む傾向があるのでせう。特にマンは數字を玩んだ人でした。一八七五年に誕生、一九〇〇年二十五歳で『ブデンブロオク家』を完成、一九〇五年三十歳でカアチヤ・プリングスハイム (Katja Pringsheim) と結婚といふ次第です。後に彼は一九四五年七十歳で死ぬであらう、などと豫言までしましたが、[2] これは些か勇足でその年には死にませんでした。が、希望とは叶へられるものらしく、それから丁度十年後の一九五五年に滿八十で亡くなつてゐます。

『ブデンブロオク家』は二十九年後の一九二九年ノベエル文學賞受賞の對象となりました。それが弱冠二十五歳の青年によつて書かれたといふことは、素直に驚いて置いていいだらうと思ひます。それではマンはそれ迄にどのやうな文學的活動をして來たのでせうか。一八九四年十九歳で處女作『顚落』(Gefallen) を發表してデエメル (Richard Dehmel) に認められ、[4] 九六年に『幸福への意志』(Der Wille zum Glück)、つゞいて九八年には、短篇集『小男のフリイデマン氏』(Der kleine Herr Friedemann) を出版してゐます。[5] これらの短篇はいづれも何らかの意味で肉體的にか精神的にか缺陷を有つてゐる主人公が、どうにかして日常の平凡な世俗生活に同化しようとして、失敗する小説です。

例へば、『小男のフリイデマン氏』についてみて置きます。乳母の不圖した科のために、フリィデマンは取返のつかぬ片端者になつて了ひました。が、彼は人生を愛しました。„Niemand versteht, mit welcher innigen Sorgfalt er, der auf das größte Glück, das es uns zu bieten vermag, Verzicht geleistet hatte, die Freuden, die ihm zugänglich waren, zu genießen wußte“.[8] 彼は Genußfähigkeit には Bildung が必要であること——Bildung 卽ち Genußfähigkeit であることを識つてゐましたから、教養を積む努力をしました。ヴァイオリンを習ひ、音樂會に行き、内外の文學書に讀耽りました。これらにも増して特にフリイデマンが好んだのは芝居でした。彼はエピキュリアンと言つていいのです。第二十回目の誕生日に彼は靜かにかう呟きます。„Das wären nun dreißig Jahre. Nun kommen vielleicht noch zehn oder auch noch zwanzig, Gott weiß es. Sie werden still und geräuschlos daherkommen und vorüberziehen wie die verflossenen, und ich erwarte sie mit Seelenfrieden.“[7] 併し、この努力に依つて勝取られた平安に、闖入して來たのがあります。聯隊區司令官の更迭が行はれ、フォン・リンリンゲン（von Rinnlingen）中佐が著任して來たのです。問題は司令官ではなく、夫人ゲルダ・フォン・リンリンゲン（Gerda）であります。

市立劇場で『ロオエングイン』(Lohengrin) が演ぜられました。フリイデマンも出掛けて行つてみると、フォン・リンリンゲン夫妻と隣合の席です。第二幕が終らうとした時、ゲルダ夫人の手から扇が落ちました。あるひは、「落した」といふ方が一層正確かもしれません。フリイデマンが拾はうと身を屈めますと、それより早く夫人がサツと採上げて、言ひました。„Ich danke.“[8] 二人の顏は殆ど觸合はんばかり、フリイデマンは一瞬彼女の胸の暖い匂を吸はざるを得ませんでした。この時、片端者のフリイデマンの平安に罅が入りました。永い努力の末に漸く得られた安心も、一人の女のために脆くも崩去つて往きます。

一八九七年作の『道化者』(Der Bajazzo) の主人公は、これと言つて肉體的缺陷はありませんが、どうしても日常の市民生活に馴染めないのです。かういふ性格も亦精神的疾病のひとつに數へられるでせう。„Ich saß in einem Winkel und betrachtete meinen Vater und meine Mutter, wie als ob ich wählte zwischen beiden und mich bedächte, ob in träumerischem Sinnen oder in Tat und Macht das Leben besser zu verbringen sei. Und meine Augen verweilten am Ende auf dem stillen Gesicht meiner Mutter.“[9] この短篇は一人稱體で書かれてゐますから、右の引用のうち一人稱代名詞は卽ち主人公を指してゐます。彼は俗惡で無趣味な大衆を輕蔑しますが、さうかと言つてアプサントを呑むで如何はしい場所に出入するボヘミアンの仲間入も出來ません。彼は小男のフリイデマン同樣藝術の鑑賞の中に、消極的幸福をみいだします。が、積極的に世間へ働掛けるやうなことは、何ひとつしませんし、また出來ないのです。好しい女性をみても戀する勇氣さへなく、言はば戀愛が芽生える以前に失戀して了ふのです。„Mein Gott, wer hätte es gedacht, wer hätte es denken können, daß es ein solches Verhängnis und Unglück ist, als ein >Bajazzo< geboren zu werden! ...“[9] この『道化者』の主人公は、後の『ブデンブロオク家』のクリスチァン（Christian）やハノオ（Hanno）、『飢ゑた人びと』(Die Hungernden)（一九〇二年作）のデトレフ（Detlef）、更に『トニオ・クレエガア』(Tonio Kröger)（一九〇三年作）のトニオと同系列に屬し、彼らの原型とみられます。

トォマス・マンは元來長篇作家でありまして、わづかに二十篇足らずの短篇しか書いてゐません。彼の六十年に渡る作家生活の間に産出した厖大な作品に於て、その占る量は微々たるものと言つて差支へな

いでせう。もうひとつ注意して置きたいのは、それらの短篇が初期にのみ書かれたものであるといふことです。更に詳しく見てみますと、約二十篇のうちの半數は一八〇〇年代につまり、『ブデンブロオク家』完成以前の作品なのです。これらの事情から、マンに於て、（特に一八〇〇年の）短篇小説は總て習作と言つていいやうに思へます。この序走の收穫が、第一番目の長篇『ブデンブロオク家』に結實するのです。ここに長篇小説家トォマス・マンが誕生した譯です。

彼は後年この作品に觸れ、„Ich hatte mir zugleich durch das breite Werk eine menschlich-künstlerische Basis geschaffen, auf der ich bei weiterer Produkution würde fußen können,—hatte mir gleichsam den Geigenkörper gebaut, auf dem ich nun freihin konzertieren mochte, dessen gutes Holz immer wohllautend mit den Saiten schwingen, dessen akustischer Hohlraum meinem Spiel volle Resonanz leihen würde...“[11] と回想してゐます。出世作に對する作者の愛情過多も手傳つてゐるやうですので、右の引用は幾らか差引いて讀まねばならないでせう。が、それはそれとして、この作品の完成に依り、彼は自分の才能をはつきりと自覺しました。人間として、作家として一人立出來る自信を得たのです。

マンの一八〇〇年代の短篇は、いづれも『ブデンブロオク家』への準備でありました。これらの短篇は、前にも述べましたやうに、殆ど同一主題の變奏（Variation）なのです。一體何故彼はこのやうな主題を執拗に繰返採上げたのでせうか。

トォマス・マンはヨハン・ハインリヒ・マン（Johann Heinrich Mann）の次男としてリウベックに生れました。父は Senator であり、市の名望家でありました。トォマスの兄は、有名なハインリヒ（Heinrich Mann）です。トォマスは名譽ある父の子であり、秀才ハインリヒの弟として無言の壓力に堪へねばなりません。この出來の惡い次男は、實業家としては父に適はず、學業に於ては兄に齒が立ちません。併し、彼とても生きて行くためには、何とかして自己主張——自己の存在の意義を見出さなくてはならないのです。彼はオペラや芝居を好む空想的少年でしたから、自然ある演技を身につけました。演技によつて、自分の弱點を周圍の眼から覆隱す方法です。常にかうした演技を行つてゐると、何所からが演技で、何所からがさうでないのか、自分にも判らなくなつて來るのでせう。演技生活の收穫はそこにあります。小男のフリイデマンも『道化者』の主人公も『ブデンブロオク家』のクリスチアンも、この演技によつて辛くも破滅から免れてゐるのです。

マンが小説を書出したのも、演技のひとつともみられます。彼は藝術家を人生の香具師と考へます。『トニオ・クレエガア』のトニオの語る所によれば、ある銀行家が小説を書始めました。彼は無瑕瑾でさうなつたのかといへば、飛でもありません。彼は監獄に入つた前科があるのです。そこで彼は自分の才能を發見しました。が、作家としての彼に必要なのは、監獄内での體驗よりも、入獄するやうになつた經緯の方なのです。„Aber ein nicht kriminneller, ein unbescholtener und solider Bankier, welcher Novellen dichtete,—*das kommt nicht vor*...“[12]

トォマス・マンのこの考は終生變らなかつたらしく、晩年の『フェリックス・クルルの告白』(Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull) 迄つゞいてゐます。慥かに、藝術家とは現實でないものを現實であるかのやうに——あるひは、現實そのものよりも一層現實であるかのやうにみせる詐欺師と言へないでもありません。マンはそのやうな詐欺師に身を落すことによつて、周圍の眼を誤魔化し、自分自身をも欺いて、安心するのです。「男子一生の事業ではない」道樂に溺れてゐるからこそ、人生の嚴肅な事業に身が入らないかの如く振舞ふのです。が、その實、裏に廻ればその「道樂」に命懸で取組むでゐるのです。

繰返して言ひますが、この演技は外部に對してだけではありません。自分自身に對しても演じてみせることが肝腎です。

トォマス・マンはかういふ演技によつて、自己存在の意義を見出します。彼の場合は、フリイデマンや『道化者』の主人公やクリスチアンの消極的なものとは異ひます。創作といふ積極的な面を有つてゐますから、それだけ強く安定してゐるのです。ゲェテ (Johann Wolfgang von Gothe) は『若いヱルタアの惱み』(Die Leiden des jungen Werthers) のヱルタアを自殺させることによつて、自分は自殺を免れたと言はれてゐます。丁度そのやうに、マンも短篇小說の主人公たちを破滅させることに依つて自らは破滅を免れ、後には見上げるやうな巨木に迄成長するのです。

日本の太宰治も亦道化の假面を被らねばならぬ運命にありました。彼は明治四十二年（一九〇九年）津島源右衞門の六男として、青森縣に生れました。津島家は（マン家同樣）土地の名門であり、父は貴族院議員も務めた家柄です。この點トォマス・マンの父が Senator であつたことを思ふと、興味があります。大地主津島家の御曹子は一廉の者にならねば、世間に對しても、一家に對しても、自分に對しても顏向が出來ません。が、一方彼は六男といふ「餘計者」として誕生したのです。この矛盾に、鋭敏な彼の惱みの第一歩があつたと言へます。

彼は青森中學を優秀な成績で修了、弘前高等學校に入學しました。この頃より學業の方は芳しくなくなります。義太夫を習ひ、料亭に出入し、藝者と同棲したりします。東京大學に進學後は一時左翼運動に參加、間もなく自首轉向しました。このやり場のない自責と學業の不振などから、カフェの女と關係し、その縺もあり、つひに心中を企てました。女は死に、太宰は生返つたのです。この事件は短篇『道化の華』の背景になりました。題名が示してゐるやうに、心中さへも彼にとつては一種の道化踊なのです。その後も彼は心中未遂あるひは自殺未遂を何度か行ひました。これらは皆彼の演技——自己欺瞞と取れなくもありません。山崎富栄との情死にしてもさう考へられなくもありますまい。この時は偶々本當に死んで了つただけのことであります。

太宰治は『道化の華』の事件があつた後、それ迄に書いたものを整理し、短篇集を企畫しました。題名は『晩年』と決めました。二十七歳で出版する處女短篇集が『晩年』であります。

以上トォマス・マンと太宰治との精神的類似面をみて來ましたが、マンの十九歳の處女作が『顚落』であり、太宰の第一短篇集が『晩年』であつたことは、注意して置いていいと思ひます。

ある日、ロオマ滯在中のトォマス・マンの許に一通の手紙が屆きました。差出人は有名なフィシア書店の店主ザムエル・フィシア (Samuel Fischer) であります。あまり長くない小說を書いてみないか、といふのです。當時トォマスは兄ハインリヒと一緒に住むでゐましたので、ゴンクウル兄弟 (Edmond et Jules de Goncourt) に倣ひ、二人でひとつの小說を書かうと思立ちました。主題はある一家の繁榮と沒落です。兄が繁榮の部を、弟が沒落の部を受持たうとしました。が、この計畫は實現せず、弟のトォマスが全部を書く結果になりました。出來上つた作品は豫想以上に長くなりました。さうして、繁榮と沒落といふよりは、沒落の方に比重がかかつたものになりました。『ブデンブロオク家』、副題は「ある一家の沒落」であります。

トォマス・マンはどうして「ある一家の沒落」を書く氣になつたのでせうか。それには前にも述べたやうな道化にならざるを得ない彼自身の精神的環境あるひは、宿命が考へられます。併し、これだけでは初期の短篇を書く動機にはなつても、「ある一家の沒落」を書く背景としては弱過ぎます。

マン家は永くつづいた豪商であり、父は Senator といふ公的名譽を

も獲得しました。が、彼は二人の息子が實業に向いてゐないのを見拔いてゐました。それに最近商賣の方も思はしくないので、彼は自分の死後商會の閉鎖を遺言してゐます。父は一八九〇年に亡くなり、商會は直ちに鎖されました。九四年母は子供たちを連れて、マン家の榮光の地リウベックを去り、ミュンヘンへ移住したのです。トォマス・マンは正しく「ある沒落一家」の末裔であります。かうした個人的理由に加へて、時代の風潮も見逃してはなりません。所謂世紀末であります。

ドイツに於けるペシミズムは、ショオペンハウア (Arthur Schopenhauer)、ワァグナア (Richard Wagner)、ニイチエ (Friedrich Nietzsche) といふ系譜を辿ります。ショオペンハウアの『意志と表象としての世界』(Die Welt als Wille und Vorstellung) が世に出たのは一八一九年ですが、一般に注目せられたのは五〇年代になつてからであります。ワァグナアは四〇年代から、ニイチエは七〇年代から登場して來ます。二十世紀に入ると、一九一四年から一八年の第一次世界大戰とその結果としてのヨォロッパの矮小化であります。シュペングラア (Oswald Spengler) の『西洋の沒落』(Der Untergang des Abendlandes) は一九一八年から二二年に掛けて出版されてゐます。ルネサンスに始り、産業革命を經て發展して來たヨォロッパの文明——即ち、近代文明は今や絶頂に達し、既に見えない所では沒落が始つてゐます。そのやうな考が人々の間に漸く感じられ出して來ました。マンの青年時代とは正にさういふ時代だつたのです。

要約してみると、次の三點になります。第一にトォマス・マン自身の一般社會に馴染めぬ性格、第二に父の死に伴ふ商會の閉鎖、第三にヨォロッパ文明の沒落意識に基づくペシミズムであります。

『精神的生活樣式としてのリウベック』(Lübeck als geistige Lebensform) によりますと、マンはロオマでゴンクウル兄弟の『ルネ・モォプラン』(Renée Mauperin) を讀み、感心しました。また、スカンヂナビアには家族小說の傳統があります。彼はこれらを手本に、今は過去のものとなつたマン商會の物語を書いてみたいと思つてゐました。併し、最初は「感受性豐かな末裔ハノオにだけ、精々の所トォマス・ブデンブロオクの物語に興味」を有つたに過ぎません。が、單にそれらの物語の前史とのみ思つて取扱つてゐた部分が獨立を主張して來たのです。かうしてトォマス・ブデンブロオクの父であるヨハン・ブデンブロオクへ、更にその父・老ヨハンへと話は遡ります。

この際、トォマス・マンはワァグナアの四部作 (Tetralogie)『ニイベルングの指環』(Der Ring des Nibelungen) の成立過程を思浮べてゐました。[13] ワァグナアの『ニイベルングの指環』も元來「ジイクフリイトの死」だけを描かうとしたものです。が、どうしてもその前史が必要になり、『若いジイクフリイト』(Der junge Siegfried) が出來、そのまた前史『ワルキウレ』(Die Walküre) が出來、更に遡つて『ラインの黃金』(Das Rheingold) が書かれました。マンは初は autobiographisch な作品を計畫したのですが、段々その因つて來た過去へと興味が擴つて行きました。ハノオといふ Künstlertum の象徵を主題とする Künstlerroman から、Familienroman へ成長して行つたのです。

『ブデンブロオク家』の描方は自然主義的ではありますが、最早その正統の末流ではありません。それでは自然主義とはどういふ理論に基づく文學思潮であるか、簡單にみて置きます。それは自然科學と唯物論で武裝し、遺傳と環境の力を重視する考です。(永井) 荷風の『地獄の花』の跋は端的にこの思想を要約してゐます。「人類の一面は確かに動物的たるをまぬがれざるなり。…(中略)…若し其れ完全なる理想の人生を形造らんとせば、余は先づ此の暗面に向つて特別なる研究を爲さざる可からずと信ずるなり。そは實に正義の光を得んとする法廷に於て、必ず犯罪の證跡と其の顚末とを、好んで精査するの必要あ

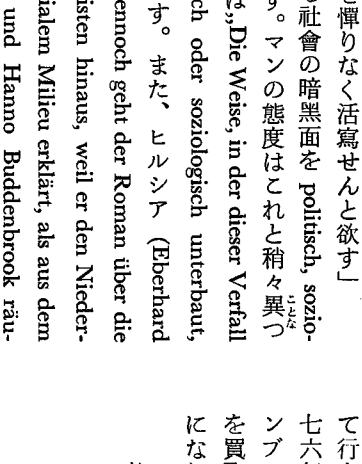
るに等しからずや、されば余は專ら、祖先の遺傳と境遇に伴ふ暗黑なる幾多の慾情、腕力、暴行等の事情を憚りなく活寫せんと欲す」

自然主義とは遺傳や環境に由來する社會の暗黑面を politisch, soziologisch に描寫する點に特徴があります。マンの態度はこれと稍々異つてゐます。アイヒナア (Hans Eichner) は „Die Weise, in der dieser Verfall sich abspielt, ist jedoch nicht politisch oder soziologisch unterbaut, sondern metaphysisch.“[14] と言つてゐます。また、ヒルシア (Eberhard Hilscher) も、かう書いてゐます。„Dennoch geht der Roman über die fatalistische Verfallslehre der Naturalisten hinaus, weil er den Niedergang weniger aus Vererbung und sozialem Milieu erklärt, als aus dem Willen der Menschen selbst. Thomas und Hanno Buddenbrook räumen der Krankheit wissentlich Gewalt über sich ein, bejahen die Auflösung, den Tod.“[15] 『ブデンブロオク家』では沒落が politisch, soziologisch にといふよりも、寧ろ biologisch, metaphysisch に取扱はれてゐます。この特徴は何も『ブデンブロオク家』とその作者にのみ限られる譯のものではありません。廣く二十世紀の文學とその生産者たち一般についても同樣の點が指摘出來ます。併し、十九世紀の自然主義的でありながら、而も猶その枠内から食出して、二十世紀文學の内面性を有する所に『ブデンブロオク家』の文學史的位置があると私は考へます。

トォマス・マンは沒落の metaphysisch な解釋をニイチエから借用して來ました。精神的なもの (Geist) の增大は、即ち生活力 (Leben) の減少を意味するといふ考です。マンは自家の繁榮と凋落を顧て、このニイチエの沒落の形而上學を體驗したのです。

(二)

『ブデンブロオク家』は大變長い小說です。先づ全體の構成からみて行きます。この長篇は十一部から成立つてゐます。一八三五年から七六年迄の約四十年間、四世代の物語です。一八三五年の十月、ブデンブロオク家の晩餐會から始ります。一家はメング通りの大きな邸宅を買取り、暫く前に引越して來ました。その時の家族構成は次のやうになります。



ヨハン・ブデンブロオク商會は、今全盛を極めてゐます。が、既に衰頽の影が音もなく忍寄つてゐるのです。未だ誰もその不吉な翼には氣がついてゐないやうです。お客たちが揃ひ、祝宴が始らうとした時、Konsul の息子ジャン (Jean) が母を傍に呼びました。一瞬彼の顏からは微笑が消え、顳顬のあたりで筋肉がぴく〳〵と動きました。異母兄ゴットホルト (Gotthold) から手紙が來たのです。財産分配の要求です。この伯父は貧しいヨゼフィネ (Josefine) と老ヨハンとの間に生れました。彼は父の反對を押し切り、身分違のシュチウキング (Stüwing) 家の女と結婚してゐます。現在ブデンブロオク家にとつて、唯一の氣懸な點といへば、このゴットホルトだけでせう。汚點のひとつと言ふよりは、その最初の兆候と言換へた方が一層適切です。

デザアトの後、皆は余興を樂しみます。外は嵐です。老ヨハンはフリュウトを吹きました。彼のたつたひとつの氣慰です。お客たちが歸つた後、Konsul の息子は父を搜します。老ヨハンはがらんとした食堂で嵐の音を獨りきいてゐました。ジャンは例の手紙を父にみせま

す。

この第一部は全體の序曲といつてもよく、到る所に結末への豫感が潜むでゐます。八つの可愛しいトォニイ (Tony) は無邪氣に宗教問答書 (Katechismus) を暗誦してゐます。トォマスとクリスチアンに就ては、お客の一人が言つた言葉が簡潔に要約してゐます。„Thomas, das ist ein solider und ernster Kopf; er muß Kaufmann werden, darüber besteht kein Zweifel. Christian dagegen scheint mir ein wenig Tausendsassa zu sein, wie? ein wenig Incroyable…“[16] 嵐の夜の祝宴とゴットホルトからの手紙といふ暗い影、これで一切は揃つた譯になります。

第二部に入ると、三八年にトォニイの妹クラアラ (Clara) が誕生します。二、三年してアントワネット夫人 (Antoinette) の死亡、老ヨハンも息子に店を譲り、程なく妻の後を追ひます。老ヨハンの時代に商會は上昇線を辿りました。彼は根からの商人だつたと言へるでせう。老ヨハンに就て、ヲルフ (Hans M. Wolff) はかう述べてゐます。„Der alte Johann Buddenbrook, der die erste Generation vertritt, ist der Prototyp des tatkräftigen, zielbewußten Menschen, der die Güter dieser Welt zu schätzen weiß, nicht nur materielle Güter wie Geld und Ansehen, sondern auch höhere Güter, denn obwohl er sich ganz seinem Beruf widmet, ist er gleichzeitig ein Freund von Kunst und Bildung.“[17] 彼は決して無趣味な銭の亡者ではありません。前にも書いたやうにフリュウトも樂しみました。ヲルフは更につづけます。„In allem seinen Tun hält er jedoch den Sinn fest auf diese Welt gerichtet; da er sich in ihr wohlfühlt, bedarf er keiner anderen Welt und steht aus diesem Grunde allen religiösen Tendenzen ablehnend, ja spöttisch gegenüber. Berufliche Tüchtigkeit, Diesseitigkeit und Harmonie mit der Welt—diese Züge bilden Symtome von Gesundheit, Urwüchsigkeit und innerer Kraft, während der Verfall der Familie erst mit der zweiten Generation beginnt.“[18] 右の引用の終の部分に疑問がなくもありません。本當に Verfall は第二代ヨハンの時に初て (erst) 現れるのでせうか。ブデンブロオク家の最初のアウトサイダア・ゴットホルトの父が、他ならぬ第一代ヨハンであるのを忘れてはなりますまい。彼も亦ブデンブロオク家の沒落に參加してゐるのです。

トム (Tom) は十六歳になり、學校を卒へ、家業を手傳始めます。トォニイはワイヒブロット (Therese Weichbrodt) のパンジオンに入りました。そこにはアムステルダムからゲルダ (Gerda Arnoldsen) も來て居りました。十數年後にトムと結婚するゲルダです。彼女に就て作者は、„Gerda Arnoldsen, die in Amsterdam zu Hause war, einer eleganten und fremdartigen Erscheinung mit schwerem, dunkelrotem Haar, nahe beieinanderliegenden braunen Augen und einem weißen, schönen, ein wenig hochmütigen Gesicht.“[19] と描寫し、直ぐ後にもう一度書いてゐます。„Gerda war ein wenig apart und hatte etwas Fremdes und Ausländisches an sich.“[20] この小説では、新しい人物が登場して來ると先づ簡略な素描をする方式です。外貌の特徴と性質、あるひは將來の行動への暗示が含まれてゐる場合があります。右の引用から、ゲルダとは「稍々高慢ちきな」「異國的感じ」の女性であることが判ります。彼女のこの特徴は、以後小説の展開に從つて重要な役割を演じます。他でもありません、トムが惹かれるのは彼女のここなのです。さうして、この選擇は彼の高尚な趣味と賢明な態度を窺はせますが、それは亦一家の沒落を促進する要素にもなるのです。

トォマス・マンはかういふ敍述法をワアグナアから學むでゐます。ワアグナアはオペラの登場人物に一定の旋律を定めました。それに依つて、彼らの性格や運命を一層適切に表現しようといふ試みです。普通ライト・モテイフと言はれてゐるものがこれです。マンはこの方法

を小説の敍述の面に應用したのです。

第三部は一八四五年の六月になります。皆が庭でコオヒイを喫むでゐる所へ、一人の訪問客がありました。グリウンリヒ（Bendix Grünlich）です。ブデンブロオク商會とも取引のあるハンブルクの商人です。この男もブデンブロオク家に災を齎す人物です。グリウンリヒだけに罪があるとは言へません。彼をトォニイの配偶者に選むだ方にこそ不幸の原因は求められる可であります。更に遡つて考へれば、グリウンリヒに求婚して來る隙を許した時既に不幸は始つてゐるとも言へます。そのグリウンリヒに就ては、かう描寫されてゐます。„Sein Gesicht unter dem hellblonden, spärlichen Haupthaar war rosig und lächelte; neben dem einen Nasenflügel aber befand sich eine auffällige Warze. Er trug Kinn und Oberlippe glattrasiert und ließ den Backenbart nach englischer Mode lang hinunterhängen; diese Favoris waren von ausgesprochen goldgelber Farbe.“[21]

彼は數日後トォニイへ求婚して來ました。父は先づそれに當り障りのない返事を書きました。當のトォニイは言ひます。„Ich habe ihn beständig mit spitzen Redensarten verhöhnt…Ich begreife überhaupt nicht, daß er mich noch leiden mag! Er müßte doch ein bißchen Stolz im Leibe haben…“[22] グリウンリヒにはいま ein bißchen Stolz など云々してゐる餘裕はないのです。理由は後で判ります。とにかく、彼はトォニイとの結婚を望むでゐるのです。どうしても、ブデンブロオク家の娘と結婚しなくてはなりません。父の Konsul は考へました。彼は妻に言ひます。„Wir haben uns in den letzten Jahren bei Gott nicht in allzu hocherfreulicher Weise aufgenommen…Die Geschäfte gehen ruhig…ach, allzu ruhig, und auch das nur, weil ich mit äußerster Vorsicht zu Werke gehe…Unsere Tochter ist heiratsfähig und in der Lage, eine Partie zu machen, die allen Leuten als vorteilhaft und rühmlich in die Augen springt—sie soll sie machen!“[23] 重大な發言です。二、三年來「商賣はうまく行つてゐない」のです。先代ヨハンの時代に家業は上昇線を辿りましたが、息子のヨハンの代になつてからは停滯してゐるのです。Konsul が「あまりにも用心して」掛るからなのです。„Zwar ist der jüngere Johann Buddenbrook seinem Vater als Geschäftsmann ebenbürtig, ja ihm im entschlossenen Ergreifen des geschäftlichen Vorteils zuweilen sogar überlegen. Trotzdem ist er ein schwächerer Typus, denn ihm fehlt die unbeschwerte, problemlose Diesseitigkeit des alten Buddenbrook; sein Kopf ist, in den Worten seines Vaters, ≪voll christlicher und phantastischer Flausen≫, d. h. er ist unfähig, sich mit der Welt, wie sie ist, abzufinden, und bedarf des Glaubens an ein Jenseits, um das Leben zu ertragen.“[24] Konsul には逡巡する纖細な神經が潜むでゐます。知的には洗練されてゐますが、それだけ實際の活動家としては弱くなります。Konsul の精神的面の上昇と反比例して、一家の物質的下降は漸く表に姿を現し始めました。ジャンはこれにどう對處しようとするでせうか。いい緣組——商會の名譽のために、または金庫のために有利な緣組に依つて切拔ける方法です。それにはトォニイとグリウンリヒの結婚は喜ばしいと言つていいでありませう。彼の帳簿は額に入れて掛けて置きたい程です。「この緣談はどうしても纏めねばならぬ」——これは父の意志といふよりは、ブデンブロオク一家の意志なのであります。

トォニイはグリウンリヒとの結婚を思ふと食慾さへなくなりました。彼女は父にせがみ、トラヱミュンデへ避暑に出掛けます。彼女は知合のシュワルツコップ（Diederich Schwarzkopf）の家に泊めて貰ひます。ここの息子モルテン（Morten）は町へ出て醫學を勉強してゐますが、丁度夏休で歸省中でした。トォニイは彼と海岸に行き、ある日二人は接吻しました。彼女は父へ手紙を書き、モルテンのことに觸れ

ます。父から返事が來ました。„Wir sind, meine liebe Tochter, nicht *dafür* geboren, was wir mit kurzsichtigen Augen für unser eigenes, kleines, persönliches Glück halten, denn wir sind nicht lose, unabhängige und für sich bestehende Einelwesen, sondern wie Glieder in einer Kette,…“[25]

グリウンリヒの求婚はなか〳〵積極的です。烈しい雨の日、突然彼はシュワルツコップ家を訪れて來ました。彼はトォニイとの間を邪魔しないで貰ひたい、と抗議します。細かい雨の降る日です。トムが迎へに來ました。帰の馬車の中で、トォニイはモルテンの面影を追ひます。あるひは自分は結局グリウンリヒと結婚するやうになるのではないか、と考へます。もしさうなるとしても、グリウンリヒなどの知らないことを識つてゐます。モルテンは „Die Adeligen sind—im *Prinzip* gesprochen—verächtlich!“[26] と言ひました。トォニイはもう以前のトォニイではありません。お馬鹿さんではありません。トムが妹を慰めます。„Das gibt sich. Man vergißt…“[27] トォニイが應へます。„Aber ich will ja gerade nicht vergessen!“[28]

トォニイはメング通りでの一夜をぐつすりと眠りました。翌朝彼女は七時前に眼を醒し、机に向ひます。そこには一家の克明な記錄簿が置いてありました。彼女はそれを手に取り、ぱら〳〵捲つてゐました。が、不意にペンを取上げると、„…Verlobte sich am 22. September 1845 mit Herrn Bendix Grünlich, Kaufmann zu Hamburg.“[29] と書足したのです

トォニイの持參金は八萬マルクと決りました。式は翌四六年の年頭に行はれました。市の半分の人々が出席しました。トォニイは一旦新郎と馬車に乘込みましたが、また降りて來ました。彼女はもう一度父を抱緊め、„Adieu, Papa…Mein guter Papa!“[30] と言ひ、それから、そつと囁きます。„Bist du zufrieden mit mir?“[31] 馬車が去り、夫人が夫に尋ねます。„Glaubst du, daß sie glücklich ist mit ihm?“[32] „Ach, Bethsy, sie ist zufrieden mit sich selbst; das ist das solideste Glück, das wir auf Erden erlangen können.“[33] といふのが夫の答でありました。

作者はこの部分でトォニイに「お父ちやん、これでご滿足でしよ」と言はせます。彼はさう書くことにより、トォニイのために泣いてゐるやうにみえます。が、實は父 Konsul のためにこそ泣かねばならなかつたのです。父のその時の氣持は、嫁ぎ行く娘のより遙かに複雜なものだつた筈です。妻の殘酷とも思へる問への答は、無理にも自分自身を納得させてゐるかのやうに取れぬではありません。併し、この時の彼の氣持は大變錯綜したものだつたと思はれます。慥かに、彼はこの縁談を歡迎しました。彼の意志と言つては適切ではありません。ブデンブロオク家の意志が、家長である彼の意志といふ形を取つたに過ぎないのです。彼はブデンブロオク家の家長として、一家の名譽のため、または經濟的理由のためにどうしてもこの縁組は結ばねばならなかつたと言へませう。この點がどうも充分に書かれてゐないやうに思へるのです。坂本繁二郎流に言へば、「見えない裏側」が描けてゐないのです。[34]

當時トォマス・マンはまだ二十五歳にもなつてゐませんでした。二十代前半の青年には人生の裏側がみえてゐなくても仕方ないのかもしれません。晩年の（森）鷗外などはそこに行くと流石に老練で、『澀江抽齋』には次のやうな箇所があります。「さて抽齋が弘前にゐる間、江戸の便がある毎に、必ず長文の手紙が德から來た。…（中略）…抽齋は初め數行を讀んで、直ちに此書信が德の自力によつて成つたものでないことを知つた。文章の背面に父允成の氣質が歴々として見えてゐたからである。

允成は抽齋の德に親まぬのを見て、前途のために危んでゐたので、抽齋が旅に立つと、すぐに德に日課を授けはじめた。手本を與へて手

習をさせる。日記を附けさせる。そして、それに本づいて文案を作つて、徳に筆を把らせ、家内の事は細大となく夫に報ぜさせることにしたのである。

抽齋は江戸の手紙を得る毎に泣いた。妻のために泣いたのでは無い。父のために泣いたのである」

トォニイの結婚後程ない頃です。トムは花屋の賣子アンナ（Anna）と別れを惜むでゐました。彼は „Aber wirf dich nicht weg, hörst du?“[35] と繰返して言ひ、アムステルダムへ出發します。商賣の見習に行くのです。愼重なトムは、決して輕卒な真似はしてくれるな、と念を押します。このアンナは小説の終の方になつてもう一度登場して來ます。（ゲルダとは對蹠的に）大勢の健康な子供の母親として、トムの棺に最後の挨拶をしに姿をみせます。

トムとアンナ、トォニイとモルテンが結婚してゐたら、どうなつてゐたでせう。結婚とは元來二人の間の愛情が決定するのであるならば、當然さうなつていい筈ではないでせうか。所が、それは到底出來ない相談です。由緒あるブデンブロオク家の人々は、商會の名譽のために、あるひはまた金庫のために、結婚相手を選ばなくてはならぬ宿命なのです。

第四部に入りますと、ブデンブロオク家に覆被さる沒落の影は、いよ〳〵その正體を明かにして來ます。一八四六年十月、トォニイは女の子を産みました。名前はエリカ（Erika）です。併し、トォニイの細やかな幸福は慌しく去つて行きます。夫グリウンリヒの破産であります。彼は二重帳簿を作つて、Konsul を騙したのです。初めから金錢のために、彼はブデンブロオク家の娘と結婚したのでした。今になつてみて、彼のあの卑屈な迄の求婚の態度も頷けます。グリウンリヒにとつて、トォニイ個人はどうでもよかつたのです。「ブデンブロオク家の娘」であることが目的でした。トォニイはグリウンリヒと「商會のため」に結婚し、グリウンリヒは「金錢のため」に彼女を選んだに過ぎません。一家の世俗的繁榮の副産物として、このやうな緣組も避けられぬものと言へませう。

トォニイはエリカを連れてメング通りの實家に戻つて來ました。彼女はもう一児の母ですから、當然離婚は躊躇ひました。もと〳〵彼女はこの結婚に消極的でしたが、今になると離婚にも踏切れないのです。今度もきつぱりと離緣を決斷したのは Konsul でした。この緣談を喜び、積極的に押進めた父その人でした。これも彼個人の意志といふよりは、一家の意志とみなくてはなりますまい。トォニイは出戻になつたからと言つて、卑下したりなどはしません。名譽あるブデンブロオク家の娘として街を濶歩します。

惡いことは他にもあります。アムステルダムに行つてゐたトムが健康を害し、フランスのポオに轉地しました。

一方、トムの弟クリスチアンはその後どうなつてゐるか、みて置かなくてはなりません。「伊達者（だてしや）」（Incroyable）[36] と評され、祖父から „'n Aap is hei.“[37] と言はれたクリスチアンは、見習のためロンドンに渡つてゐます。彼は大方の豫想通り、堅氣の商人の道は進めぬ運命にあります。彼は常に何所か體の不調を訴へてゐないと氣がすまないのです。恰も病氣であるのを自慢してゐるかのやうに思はれます。クリスチアンとはブデンブロオク家に紛込むだ第二のアウトサイダアとも言へます。彼はロンドンで實業にはあまり興味を示さず、芝居見物に熱をあげ、南米へ行く希望を有つてゐます。彼がワルパライソオへ向つてイギリスから船出したのは、一八五一年でありました。

一八五四年の夏の終の日曜日です。外は雷を含むだ雨雲が空を覆つてゐました。この日突然、Konsul・ヨハン・ブデンブロオクはこの世を去つて往つたのです。

第五部は Konsul の遺書の開封、クリスチアンの歸國、伯父ゴット

ホルトの死から始まります。さうしてトムとゲルダ、クラアラとチブルチウス (Sievert Tiburtius) の婚約、更に結婚へとつゞきます。

ここでもう一度、ヨハン・ブデンブロオクとはどういふ人であつたかを振返つて置きます。„War der verstorbene Konsul, mit seiner schwärmerischen Liebe zu Gott und dem Gekreuzigten, der erste seines Geschlechtes gewesen, der unalltägliche, unbürgerliche und differenzierte Gefühle gekannt und gepflegt hatte, so schienen seine beiden Söhne die ersten Buddenbrooks zu sein, die vor dem freien und naiven Hervortreten solcher Gefühle empfindlich zurückschreckten.“[39] 父・老ヨハンの言葉を借りれば、彼は „voll christlicher und phantastischer Flausen“[38] なのであります。彼自身「あまりにも用心して掛るために」(mit äußerster Vorsicht) 爲事がうまく行かないのを自覺してゐました。Konsul・ヨハンこそ、一家の中で「非日常的」(unalltäglich)「非市民的」(unbürgerlich)「繊細な」(differenziert) 感覺の最初の持主であつたと言へます。父ヨハンと較べると、それだけ商人としては弱くなります。實業に携はる者は、現世の幸福を堅く信じ、日常的・市民的・合理的感覺の所有者でなくてはなりません。が、老ヨハンはブデンブロオク家の衰微に責任がないかと言へば、簡單にさうとばかりは言へないのです。彼はヨゼフイネとの間にゴットホルトといふ（一家から食出した）息子を持ちました。この息子は長じて後、身分違のシュチウキング家の女と父の反對を押切つて結婚します。これはブデンブロオク家の名譽の上についた一點の「しみ」と言へませう。それだけではありません。彼は財産の分配を要求し、一家の金庫までも搖るのです。初代ヨハンがゴットホルトの父であるといふ事實は動し得ないのです。

いよ〳〵ブデンブロオク家は第三代目トォマスの時代になりました。感覺は一段とこまやかになり、身嗜は洗練されますが、それだけ決斷力が弱まり、逡巡が始まります。逞しさの減少です。

クリスチアンが八年振に歸つて來ました。一八五六年二月であります。彼は喉に物が詰つて呑込めない苦痛を訴へます。トォニイが „du machst dich ja lächerlich!“[40] と言ひます。さうです。彼女の言ふ通りです。クリスチアンは自分を物笑の種にする以外、周圍へ働き掛けることが何ひとつ出來ないのです。しないのではありません。出來ないのです。ゴットホルトがブデンブロオク家の最初の病根であるとすれば、クリスチアンは一層惡化した病狀を呈してゐます。兄のトムは弟に就て、„Ihm fehlt etwas, was man das Gleichgewicht, das persönliche Gleichgewicht nennen kann.“[41] と評します。

クリスチアンは兄の商會で働くことになりました。が、爲事に興味を有つたのは、最初の一週間に過ぎません。段々事務所に出るのが晩くなり、到頭烟草を吸ひ、コニヤクを飲むで午前中が潰れるやうになりました。それだけでは收りません。午はクラブに行き、夕方迄還らなくさへなります。兄弟の仲は明かに不和になつて行きます。

伯父ゴットホルトが亡くなつたのは、その年の五月でありました。彼はアントワネット (Antoinette) の産むだ弟妹に較べ、萬事に損な立場にゐたと言へませう。トムは死んだ伯父に、„Du hast es nicht sehr gut gehabt, Onkel Gotthold“[42] と話掛けます。トムから見れば、彼の不幸は擴大します。„Du hast es zu spät gelernt, Zugeständnisse zu machen, Rücksicht zu nehmen…“[43] とトムはつゞけます。併し、さういふトムに對しては、≫Du hast es *zu früh* gelernt,…≪ と言へなくもありません。„Aber das ist nötig…Wenn ich wäre wie du, hätte ich vor Jahr und Tag bereits einen Laden geheiratet…Die Dehors wahren!“[44] とトムはアンナの想出にも觸れて、感想を述べます。「體面を保つ」ためには、花屋の小娘風情と結婚する譯には行きません。が、實はトムのこの賢明な（と自分で思込むでゐる）態度がもと〳〵

考へものなのです。

一八五六年七月二十六日、旅先のアムステルダムからトムは母へ手紙を書きます。彼女は夫の死後、以前にも増して信心深くなり、牧師を好むで泊めるやうになりました。牧師チブルチウスも故郷リガへの歸省の途中メング通りの家に泊めて貰ひました。彼はどうやらクラアラが氣に入つた樣子です。母はアムステルダムにゐる息子に、この緣組に就ての意見を求めてやりました。トムの手紙は母のその問合への返事です。彼はクラアラとチブルチウスとの結婚に贊成し、加へて自分とゲルダとが婚約した旨を母へ報告します。テレェゼのパンジオンでトォニイと一緒だつたゲルダです。

トムは花屋の少女・アンナとは結婚しませんでした。初から結婚しようなどとは思つてゐなかつたのです。彼は死んだゴットホルトの前で、„Wenn ich wäre wie du, hätte ich vor Jahr und Tag bereits einen Laden geheiratet…“ と言ひました。トムはゴットホルトのやうに食出した人間ではありません。名譽あるブデンブロオク家の體面を保つて行かねばならぬ後繼者なのです。彼は小店の賣子を捨て、「賢明にも」ゲルダを選びました。„…war dieses siebenundzwanzigjährige Mädchen von einer eleganten, fremdartigen, fesselnden und rätselhaften Schönheit.“[45] と作者は書いてゐます。彼女が最初に登場する第二部の描寫と比較してみませう。elegant と fremdartig といふ言葉はどちらにも共通して使はれて居り、今度はそれに rätselhaft といふ形容詞が加へられてゐます。

とにかく、ゲルダは（皆とは）何所か違つて（fremdartig）ゐます。さう言へば、彼女を選んだトムにしてもさう言へます。彼は外套、上着、帽子、チョッキ、ズボン、カラアなどを人並以上に多く有つてゐます。下着類までもハンブルクから取寄せます。シャツは日に二度も換へ、髪には香水を振掛けます。これは健全な市民生活からみて、些か行過と言へませう。

トォニイと（モルテンではなく）グリウンリヒとの結婚、トムと（アンナではなく）ゲルダとの結婚、クラアラとチブルチウスとの結婚、これらには充分注意して置く必要があります。いまこの一家の狀態は、例へてみれば老樹が見事な花を附けてゐるのに、既に幹は「がらんどう」になつてゐるやうなものなのです。ブデンブロオク家の沒落――それは芯からの避けられぬ下降でありますから、一家の皆が商會のためを氣遣へば氣遣ふ程、益々沒落を促進する手助をしてゐる結果になります。トムやトォニイの理性的配慮も、下降への助力に他なりません。さうして、商會の停滯、下降が感じられ出すと、彼らの商會への愛は一層募ります。その結果、沒落だけが確實に進行するのです。

クラアラとチブルチウスとの結婚式はクリスマスの直後に、トムとゲルタとのは翌一八五七年の初に行はれました。（つゞく）

〔註〕

（1）トオマス・マンは兄ハインリヒの招きで一八九六年から九八年迄ロオマに滯在した。『ブデンブロオク家』はロオマで書始められ、後ミュンヘンで完成した。

（2）Lebensabriß.

（3）トオマス・マンはまた七及び七の倍數を好むだ。例へば、『魔の山』に於てハンス・カストルプは三週間（7×3）の予定で出発し、それが七週間、七ケ月つひには七年に延びる。サナトリウムの食堂には七個のテェブルがあり、ハンスの病室は34号室（3＋4＝7）である。

（4）„Ich habe eben Ihre wundervolle Erzählung ≪Gefallen≫ in der ≪Gesellschaft≫ gelesen…und muß Ihnen mein Entzücken und meine Ergriffenheit schreiben. Es gibt heutzutage so wenig Dichter, die ein Erlebnis in einfacher, seelenvoller Prosa darstellen können,

daß Sie mir diese etwas aufdringliche Bekundung meiner Freude und Bewunderung schon erlauben müssen.“ (An Thomas Mann. 4. 11. 1894)

(5) 次の作品が収められてゐる。
Der kleine Herr Friedemann. Der Tod. Der Wille zum Glück. Enttäuschung. Der Bajazzo. Tobias Mindernickel. (S. Fischer/Berlin)

(6) Die Erzählungen 1 (Moderne Klassiker/Fischer Bücherei 1967) S. 60.

(7) Ebenda, S. 62.

(8) Ebenda, S. 66.

(9) Ebenda, S. 81.

(10) Ebenda, S. 104.

(11) Betrachtungen eines Unpolitischen (S. Fischer 1956) S. 82.

(12) Die Erzählungen 1. (Fischer Bücherei) S. 226.

(13) Lübeck als geistige Lebensform.

(14) Hans Eichner : Thomas Mann (Francke 1961) S. 9.

(15) Eberhard Hilscher : Thomas Mann (Volk und Wissen 1965) S. 15.

(16) Th. Mann : Buddenbrooks (Moderne Klassiker/Fischer Bücherei 1967) S. 11.

(17) Hans M. Wolff: Thomas Mann (Francke 1957) S. 17f.

(18) Ebenda, S. 18.

(19) Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 65.

(20) Ebenda, S. 65 f.

(21) Ebenda, S. 70.

(22) Ebenda, S. 80.

(23) Ebenda, S. 85.

(24) Hans M. Wolff : Thomas Mann (Francke) S. 18.

(25) Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 111.

(26) Ebenda, S. 117.

(27) Ebenda, S. 118.

(28) Ebenda, S. 118.

(29) Ebenda, S. 120.

(30) Ebenda, S. 124.

(31) Ebenda, S. 124.

(32) Ebenda, S. 125.

(33) Ebenda, S. 125.

(34) 「三四年前、座右宝の後藤貞太郎が九州の坂本繁二郎君を訪ねた時、何の話からか、坂本君は「青木繁とか、岸田劉生とか、中村彝とか、若くして死んだうまい画描きの絵を見てゐると、みんな実にうまいと思ふが、描いてあるのは何れも此方側だけで、見えない裏側が描けてゐないと思つた」と云つてゐたそうだ」と志賀直哉は『白い線』に書き、更にかう註釈してゐる。「私の短篇には又次のやうな事が書いてある。

——実母を失つた当時は私は毎日泣いて居た。——後年義太夫で「泣いてばつかり居たわいな」といふ文句を聴き当時の自分を憶ひ出した程によく泣いた。兎に角、生れて初めて起つた「取りかへしのつかぬ事」だつたのである。よく湯で祖母と二人で泣いた。

これも、祖母が私と一緒に母の死を悲しんで泣いたと解して書いてゐるが、勿論祖母の気持にもそれはあつたかも知れないが、それよりも恐らく祖母は泣く私が可哀想で涙を流したのだと近頃は思ふやうになつた。若い頃に書いたものはかういふ点が大変単純で、坂本君の云ふ裏側が少しも書けてゐないといふのは小説の場合も同じ事だと思つた」

(35) Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 127.

(36) „Stutzer, Modegeck. Zur Zeit des französischen Direktoriums um 1795 trugen viele Republikaner dreieckige Hüte mit übergroßen Krempen, Incroyables genannt.“ (Theo Rosebrock : Erläuterungen zu Thomas Manns ≫Die Buddenbrooks≪—C. Bange—S. 49)

(37) Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 11.
(38) Ebenda, S. 195.
(39) Ebenda, S. 35.
(40) Ebenda, S. 198.
(41) Ebenda, S. 199.
(42) Ebenda, S. 208.
(43) Ebenda, S. 208.
(44) Ebenda, S. 208.
(45) Ebenda, S. 220.

〔参考文献〕

Thomas Mann : Buddenbrooks (Moderne Klassiker/Fischer Bücherei 1967)

Thomas Mann : Die Erzählungen 1 (Moderne Klassiker/Fischer Bücherei 1967)

Thomas Mann : Altes und Neues (Stockholmer Gesamtausgabe, S. Fischer 1953)

Thomas Mann : Betrachtungen eines Unpolitischen (Stockholmer Gesamtausgabe, S. Fischer 1956)

Thomas Mann : Die Entstehung des Doktor Faustus (Bermann-Fischer 1949)

Thomas Mann : Gesammelte Werke Band XII—Zeit und Werk—(Aufbau 1956)

トオマス・マン作 瀬戸内晴美・無極訳『ブッデンブロオク一家』（岩波文庫）

*

Hans M. Wolff : Thomas Mann (Francke 1957)

Hans Eichner : Thomas Mann—Eine Einführung in sein Werk (Francke 1961)

Arnold Bauer : Thomas Mann (Colloquium 1960)

Paul Altenberg : Die Romane Thomas Manns (Hermann Gentner 1961)

Eberhard Hilscher : Thomas Mann (Volk und Wissen 1965)

Theo Rosebrock : Erläuterung zu Thomas Manns ≫Die Buddenbrooks≪ —Dr. Wilhelm Königs Erläuterungen zu den Klassikern—(C. Bange 3. Auflage)

Klaus Schröter : Thomas Mann (Rowolt 1964)